蝶の谷

杉本苑子

歴史小説
選書　5

人物往来社

<著者略歴>
大正14年東京に生まれ，文化学院文科卒業。昭和26年より故吉川英治氏に師事し，「孤愁の岸」にて第48回直木賞受賞，主要著書，「華の牌文」「二条の后」等。
現住所＝東京都田無市下向台747

検印廃止

歴史小説選書　5

蝶の谷

昭和42年3月20日　発行

著　者　　杉本苑子

発行者　　八谷政行

発行所　株式会社　人物往来社

東京都千代田区丸ノ内3ノ2新東京ビル
電話　代表（212）3931　振替　東京101

定　価　390円

印刷・大文堂印刷　製本・長谷川製本
乱丁・落丁本はお取替いたします。

蝶の谷

杉本苑子著

人物往来社　歴史小説選書5

蝶の谷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蝶の谷

一

舟番小屋のいろり端で、はじめてその子供を見かけたとき、お俊が味わった感情は何とも奇妙なものであった。

力いっぱい抱きしめてみたい愛着と、いきなり目の前の川へでも叩きこんでやりたい憎しみと……。相反する激情に一時に襲われて、乳の奥がキュッと痛くなったほどである。

五歳ぐらいだろうか。子供はボロを着ていた。哀れなくらいやせこけてもいたが、顔だちの美しさは類がなかった。腕っこきの細工人が、小刀の先きに精神を集注して彫りあげた人形さながら、ちんまりととのった鼻すじ、口もと……。薄皮まぶたの、切っこみの深い目に、濃いまつげが翳を落として、まばたきするたびに眸がさえざえと濡れかがやく。いま切って、泉にひたした

桔梗の花のような、あざやかな印象であった。

「おじさんちの子？」

せきこんでお俊は訊いた。

「いいや、わしの妹と、ある浪人者とのあいだに生れたガキでございますよ」

いろりの炎へ枯柴をつぎたしながら、初老の船頭はその柴ごと、緩慢に手をふった。

「水ッ児のうちに両親に死なれちまったもんで、しかたなく引きとって育ててはおりますが、実子が五人もいるくらし向きでは、ろくさま雑炊もすすらせられません」

「手放すつもりはないの？」

「え？」

「あたしにくれる気はないかと訊いているんですよ」

聖天さまへの参詣途上、月に一度は渡舟に乗ってくれるこの、年増ざかりのお内儀を、中山小十郎とやらいう高名な長唄うたいの妻だとは、船頭もうすうす承知していた。

〽猿若の、ワキ師は杵屋、江戸芸者、

振りは志賀山、唄は中山……

そんなはやり唄さえ耳にしている昨今なのである。

思いがけない申し出に彼はとまどい、それでも一生けんめいな口ぶりで、貰っていただければ

わしはもとより、チビにとっても夢のような幸せだと頭をさげた。
「うれしいッ、ではきめましたよおじさん。とりあえず、これは結納のおしるしに……」
手ばやく一両小判を一枚、懐紙にくるんで小屋のかまちに置くと、辞退する船頭へ、
「あさっては日がいいわ。まちがいなく和泉町の宅へつれてきて下さいね、たのみますよ」
おしかぶせて立ちながら、お俊は子供のそばへすり寄った。
「坊、名前はなんていうの？」
上目づかいに子供は答えた。
「万蔵っていうの」
容貌のさわやかさとはうらはらな、そそるような、低い、ゆっくりした嗄れ声であった。乳の奥がお俊はまた、いきなりキュッと痛くなった。

約束どおり中一日おいて、平井村の渡守りは子供をおぶってきた。小十郎も応対に出てさらに五両づつみののし紙をわたし、今後いっさい、かかわりは持ってくれるなと念を押した。りちぎな伯父は何度も礼をのべ、子供の将来をたのんで帰って行った。
さきに渡した一両のうちから支度してやったのだろう。木綿ものながら、桜に春駒を染めたま新しい袷を子供は着せられていた。

お俊はそれをぬがせ、昨日、日本橋の越後屋でととのえた深紅の地に、金糸で鶴の丸を織り出したいかにも芸人の家の子らしいはでな絹小袖と着かえさせ、これも大いそぎで子供部屋らしくしつらえ直した二階の六畳へ、万蔵をつれてあがった。

おびただしいもて遊びと菓子の量に、子供はどぎもをぬかれ、たちまち狂気のようになって咀嚼と遊戯に没頭し出した。

「たいしたきりょうだなお俊、こいつは掘り出し物だよ」

ふだん陰気な小十郎が、めずらしくはずんで云った。結婚して六年になるというのに、子宝にめぐまれなかった彼らなのである。

「聖天さまのご利益だわ。月参りを欠かさなかったおかげですよ、あなた」

夫婦は有頂天になった。つききりでチヤホヤし、夕飯も尾かしら附きに赤飯たまご焼き、刺身をおあがり、キントンはどうだとひと騒動やったあげく、あくる朝見ると、子供は絹夜具のまん中におねしょと大便を洩らしていた。

環境がかわったためのそそうだと夫婦は解釈したが、翌日、翌々日の晩も大小両方で買いたての夜具をよごし、とどのつまり高熱、腹痛をおこしてころげまわるさわぎに、あわてて医者を迎えると「急性の脾肝だ」という。たべつけないご馳走を大量に、急激に、小さな胃ぶくろにつめこんだための異状とわかった。

居合せたお俊の兄――志賀山流振付けの二代目家元、中村伝次郎がにがりきって云った。

「ネコの仔をもらってきたのとはわけがちがうぜ。人ひとり引きとるにはよほどの覚悟がいるはずなんだ。子供はお前さんたち夫婦の玩具じゃないんだからな」

もともとばかな女ではない。お俊はわれに返った。冷静をとりもどした。同時に、母親というものの愛の在り方、その自覚が、すっくりと肚にはいった。

――万蔵は長唄の稽古をはじめさせられた。やがては継がなくてはならない家業である。稽古場へつれてゆかれるのを見すまして、お俊はいそいそ茶うけの用意にかかったが、四半時にもならないうちに、小十郎がしかめつらしながら茶の間へもどって来た。

「だめだ。万蔵のやつ、とうていものにはならない」

ひどい音痴だったのである。

〈岡崎女郎衆　岡崎女郎衆

岡崎女郎衆は　よい女郎衆

ごく初歩の練習曲の、出だしの一節すらみごとに調子をはずしてしまう。

大便はどうやらやまったが、おねしょはあいかわらず時々もらすし、無口はよいとして、生みの父だったとかいう浪人ゆずりの、しぶとく、強情そうな性格もすこしずつほの見えてきていた。夫婦はため息をついた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「返してしまおうか。伯父の船頭のところへ」

小十郎はこらえ性がない。お俊はやっきになった。貰い子だと思うから返す気もおこる。生みの子だったらどこへ苦情の持って行きようもないではないか……そう云いはり、

「役者にしてはどうかしら」

と提案した。

「大名題の子にだって、うちの万坊ほどの顔立ちはいないわ。なにか一芸、身につけてやらなければ行く末あの子もこまるでしょ」

「でも役者にするためには、踊りの基礎をみっちり叩きこまなきゃならないよ」

「あたし、兄さんに相談してみる」

中村伝次郎の家へつれて行ったところ、長唄とちがって踊りの手はふしぎにスラスラのみこみ、スジがよいとまで保証された。

どうやらめどがついたのである。夫婦は胸をなでおろしたが、これが早計であった。坊ちゃまぐらしが身につき出し、はにかみが消えうせると、子供は本性を発揮しはじめた。踊りの稽古に行くたびに相弟子の女の子をいじめて泣かせる……。それもカンザシを抜きとったり袂にトカゲを入れたり、買いたての舞扇に泥をぬりたくるというような卑劣ないたずらをやるのには、師匠の伝次郎よりまず、お俊が腹をたてた。

例の、桜に春駒の木綿袷をとり出して、

「平井村へ返してしまうよ」

とおどすと、しばらくは小さくなるが、またすぐ始める。どういうわけかことに目のかたきにいじめるのは、二歳年下のお岸という少女で、おっとりと、何をされても抗わない気質が、かえって万蔵の意地悪ごころを刺激するのだろう。長唄の三味線ひき杵屋喜三郎の三番目むすめに生まれながら、踊りもきりょうもさほどではない。

「ぶきっちょ、おたふく」

と、のべつ嘲けているくせに、節句だ祭りだというたびに万蔵はお岸を家へつれて来たし、稽古所からの帰りはお岸も時おり遊びに寄って、おばさんおばさんとお俊に甘えた。母親のない子なのである。

夕ぐれになると、女盲をまじえた座頭の一団が笛をふきふき町を流して歩く。小穴をあけた紙ぶくろに灰炭をつめ、竿のさきにそれを吊りさげてうしろから振り廻すと、なにやらハラハラ降りかかる気配に、盲人たちは顔をなでまわす。たちまち顔がまっくろになるというわるいたずらに万蔵は熱中したことがあり、また、町木戸の番小屋に寝とまりしているうすノロの番太郎に、いきなり口を吸われたのをくやしがって、炊きあがったばかりの釜の飯へ砂をぶちかけたこともある。

番太が怒ってどなりこんで来、お俊から罰をくらった腹いせに、こんどは町廻りの拍子木を打ちに出たすきをねらって、板戸の敷居へ煮えニカワを流しこんだ。番太が帰ってきたころは冷え固まって、押しても引いても戸はビクともしない。町役にしかられ、したたか詫び金をとられるという一幕もあった。

お俊はねをあげた。木綿袷を持ち出してのおどしも、たびたびは効かない。ふとん巻き、灸……。結局は本気ですえっこないとタカをくくっているのか、あくどいいたずらをやめようとしない万蔵に、つい苛ら立って、ある日やにわに裾をまくりあげると、その柔かなももへ彼女は物差しをくらわした。万蔵は泣かない。かたくなな横顔、みるみるミミズばれの縞をつくりはじめたももを睨んでいるうちに、もっともっと、思いきり痛めつけて、悲鳴をあげさせてやりたいあらあらしい衝動と、身も世もないいとしさとの、あの奇妙な交錯に襲われ、おもわずお俊は物差しをなげ出した。抱きすくめられ、逆に母親に泣き出されながら、少年は誇らかな表情で座敷のまん中に佇立していた。

二

踊りの習得と併行して、万蔵はやがて柏屋舞鶴のもとへ、子方修行のためにかよい出した。舞

鶴は中村勘三郎の次男で、このとき二十四歳の新進俳優――。

「こどもなんてものは、猿廻しが猿を使う要領で仕込むにかぎる」

放言し、じじつ右手に寒竹の細ムチ、左の袂には氷ザトウを常時、用意していて、

「それ、ホイホイホイ」

わんぱくざかり幾人もを巧みにあしらうやり口は高慢げだが、子方の腕はめきめきあがるし、若親方々々としたわれているのも、他目には理解のほかだった。

万蔵ははじめ、中村市十郎という名をもらったが、まもなく中蔵とあらためた。競争相手の少年たちが大ぜいいる中へほうりこまれたことで、持ち前の負けん気をムラムラかきたてられたらしい。遊び半分だった踊りの稽古にも本気で打ちこみはじめ、ひきずられてお俊までがふるい立った。中村伝次郎の妹である。志賀山流の踊りには目があいている。自宅でのおさらいは彼女がうけ持ち、びしびし子供に文句をつけた。片方もきかん気だからまいったとは云わない。ある夜『椀久』をさらったところがお俊の気に入らず、五回七回十回とくり返して、二十回目を越したとき中蔵が倒れた。棒を倒すような倒れかたで床へのび、起きあがらないのにギョッとして鼻に手をあてると、寝息をたてている。疲労しきったのである。

小十郎がはいって来、

「かわいそうに。きびしすぎらあな」

「だってお前さん」

「掻巻ぐらい、かけてやらないのかよ」

小声で云い合っているうちに子供がむっくり起きあがった。半仮睡の白眼をきみわるく吊りあげている。口のなかで『椀久』の歌詞をうたいながら踊り出し、一曲するする踊り終ってまた、ドタッと床に倒れた。夢うつつの所作だったのだ。

お俊はよろこんだ。「根性がある」とそれを見た。小十郎はしかし肩をすくめ、うんざりした表情になった。長唄界きっての美音の持ち主と折り紙をつけられているだけに、小十郎の神経は男にしては、妻よりも子よりも繊細だったのである。

初舞台をふんだのは延享二年――。十歳の冬だった。中村座の十一月興行に『奴丹前』が出、〃さんやれおばば〃の所作を演じる舞鶴師匠の供奴に扮して、中蔵ははじめて観客に接したのだ。

評判はよかった。纏頭をたくさんもらい、おだてられて少年はのぼせあがったが、興行が終るとすぐ、舞鶴はお俊を家に呼びつけた。

「おつかれさま。はじめてのことだし、おふくろさんもさぞ気をもんだろう」

長火鉢の向うから、若い師匠はまず、あっさりいたわってくれた。しかしあとはズカズカと、

いかにも御曹子育ちらしい直截な云い方で話を切り出した。

「中のやつもね。子方とはいえこれからは商売人だ。稲荷町を振り出しに、ひときざみずつ苦労して這いあがってゆかなければならない。そこは心得ているだろうね」

稲荷町というのは、若い衆やお下がごろごろしている芝居小屋の、一階のすみにもうけられた雑居部屋のことである。

かぶき役者の階級には太く一本、横線がグイとひかれている。この線の上が『名題上』、下が『名題下』だ。

『名題上』になると紋着板に名が出る、自室があたえられるし給金もあがる。一人前の役者として世間に通用し出すわけである。

親の七光りを背に負った大名題のむすこなら、容姿、技倆などどうあれ、はじめから『名題上』の待遇をうけられる。しかし、それのない者はみじめだ。稲荷町からはじまってやっと『相中』にすすみ、三階の大部屋にあがる。ながいあいだ、ここで辛抱したあげくが『中通り』……。

「申しあげます」「いらせられましょう」程度の役しかつかない。

死もの狂いでがんばって次がようよう『相中上分』だが、たいていはこれであたま打ちとなる。門閥にはばまれるから、そうとうな腕達者でもよほどの贔屓をつかみ、金力でうしろ押ししてもらわなければ『名題上』への横線は突破できないのだ。顔立ちがすぐれ、みごとな力量を持

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com